

例会報告



●例会日 毎週金曜日 12:30~13:30 ●会長 遠藤 隆浩
 ●例会場 高山市花里町 3-33-3 TEL 34-3988 ●幹事 垣内 秀文
 大垣共立銀行 高山支店 4F ●会報委員長 長瀬 達三

第2602回例会 令和元年11月29日
 会員スピーチ

<会長の時間>

先だっの地区大会の話の続きになりますが開催地津の名物が鰻とは知りませんでした。一日目の総天然色食堂でも鰻弁当が出ましたしそのあとの西クラブの宴会も鰻屋さんで設定していただきました。鰻好きの私としましては大歓迎で弁当は次の日の朝食としていただきましたし夜の鰻づくし也大変満足でした。鰻には関東風の蒸しと関西風の焼きがありますが津ではそれが混在しているそうです。



お店の帳場に綺麗な女性がいまして。後で聞いたら若おかみさんだそうでいつも無口なSさんが今日は忙しかっただろうと声をかけていたのには笑いました。仲居さんにもよく似た綺麗な人がいて家族ではないようですが鰻のようにくねくねと歩いて愛想をふりまいていました。私が昔から不思議に思っていることがあるんですがなぜか鰻屋さんは鰻に似ている人が多いですね(笑)。とにもかくにも楽しい地区大会でした。

直前会長 門前 庄次郎

こんにちは。会長に間違い頂き、少し時間を頂戴しましたので、改めて御礼を申し上げます。先週の地区大会報告の時に改めて紹介頂きました様に、昨年度の活動に対してRIロータリー賞シルバー賞を頂く事が出来ました。その時に初めてシルバー賞と言うのが有る事を知り、上にゴールド賞、プラチナ賞があることを初めて知りました。その違いがどうなのかははっきりとは理解していませんが、評価頂いた事は事実であり有り難く思っています。



毎年そうだと思いますが、昨年度もロータリー賞を取るためには、いくつかの課題をクリアしなければいけませんでした。年度終わりにお話しました様にクリア出来なかったところが有り、ロータリー賞は難しかったなと思っておりましたが、こうして頂いた事に驚いてもおり、これも幹事さん・各委員長さんを初め会員の皆さんのおかげと感謝しています。また会員全員で取った賞だと思っています。

振り返りますと、昨年度は年度当初より移動例会も多く思いのようにやらせて頂いたなと思っています。そしてそのために、委員長さんや委員会にも大変な思いをして頂いたと反省もしています。

ただ、九ヵ年皆出席表彰で会員それぞれが学校へ出向いたり、多くの皆さんに参加頂いてスカイパークの遊歩道整備をしたりと、汗する奉仕活動も出来、良かった事も有ったのではないかも思っています。

そしてこれからの事業については遠藤会長、堺会長エレクトも事業の見直しを考えておられ、またどこかで具体的な提案をされると思いますが、変わって行く事は大切だと思います。当クラブに合った仕組みを皆で考え共有する事が大切だと思います。そして今まで以上に良い活動が出来るようになると良いなと思っています。

今後当クラブの活動がますます充実する事を願い、昨年度の協力に感謝申し上げ御礼の挨拶とします。有難うございました。

<幹事報告>

◎ガバナーより

- ・地区大会ご参加のお礼
- ・ロータリー財団「2018-2019年度 年次寄付 地区第3位」
- ・ロータリー財団 End Polio Now: 地区表彰 受賞のご報告と御礼

<受贈誌>

台北市松年福祉會(玉蘭荘だより)

<出席報告>

	出席者数	会員数	出席率
本日	30名	41名	73.17%

<本日のプログラム> 会員スピーチ

高井 道子

NPO法人ほのぼの朝日ネットワークのコンセプトは、「認知症にならない、なっても暮らせる(赤ちゃんから高齢者までほのぼの暮らせる)地域づくり」です。定6名員の「グループホームほのぼの朝日の家」を拠点として、宅老所、ふれあい会食会、子育て支援また運営資金捻出のため、「ふくろう」のブローチとストラップを製作して販売する活動にも取り組んでいます。



そのほか、活動の一環として、ほのぼの朝日ネットワークニュース「にぎわひひろば」をほぼ毎月近隣の町にも新聞折込みで発行し、グループホームでの暮らしを知っていただき、認知症になっても楽しく暮せるというメッセージを発信してきました。

そして、グループホームの利用者さんの地域での活動を通して、認知症になっても生きがいを持って暮らせることを理解してもらい、また、理事長(高井)がキャラバンメイトとして、認知症サポーターを養成する活動にも取り組んでいます。

NPO法人ほのぼの朝日ネットワークは地域の福祉の増進を目的とし平成14年8月に設立、平成15年1月に認証され、法人としての活動を開始しました。

その基になったのは、平成11年11月に朝日町小学校の体育館(旧大野郡朝日村)で上映された映画『都上一揆』の上映運動を担った上映実行委員会のメンバー(生協の組合員理事高井、養護教諭、トマト農家、未来の手話通訳、寺の坊守、幼稚園教諭、等)を中心に、死ぬまで暮らせる、赤ちゃんから高齢者まで楽しんで暮らせる地域づくりをしようと設立したボランティアグループほのぼの朝日ネットワークでした。住民自らが自主的に作ったこの地域では、初めてのボランティアグループでした。

例会報告

村の社会福祉協議会に福祉のニーズの聞き取り調査をして、その中から自分たちがやりたいこと、また自分たちが必要だと感じていることに取り組みました。公民館での食事会や、クリスマス会、調理実習、読み聞かせの会、リサイクルバザー、グループホームの学習会と見学、社会福祉協議会の配食の手伝いなど多岐にわたりました。そのうち、村がオウムから買い戻した古民家を貸してもらえらることになり、高井が当初やりたかった宅老と記兒も始めることができました。

当時、気軽に集まっておしゃべりのできる宅老所は、ありませんでした。村のデイサービスは、重度の障害のある方から認知症の方など20人が一緒に過ごし、認知症の方への個別の対応が難しくなったようなので、何とかそういう方の役に立ちたいという思いがあったので、そういう活動のできるものがとても嬉しかったです。さらに、生協での福祉エンパワメントの学習をしていくうちに、急激な高齢化社会を迎えるこの日本で、認知症（当時は痴呆症と言っていた）患者さんが増えるということが明らかになり、当時のアドバイザーだった岐阜経済大学の中井教授が、これからの活動として認知症高齢者のグループホームを作ると、宅老所も一緒に継続できると言われたので、生協の協力で、ほのぼの朝日ネットワークのグループホーム作りが始まりました。日本福祉大学の中井先生のゼミの学生と生協のグループホーム研究会とともに、当時の朝日村役場の住民福祉課長の協力で高齢者福祉調査を三次にわたって行い、住民が、在宅福祉サービスを利用して在宅介護を希望していることがわかると同時に、認知症の症状が出ていたが高齢者32人いることがわかりました。この調査報告と、認知症とグループホームの理解を得るために、グループホームを作っちゃおう集いを平成14年5月に行い、高山市で初めてできたグループホームの理事長に講演していただきました。今、思えば、この集いが、地域の方たちに認知症の理解をしていただく活動の第一歩だったと思います。その後、平成14年10月より、ほのぼの朝日ネットワークニュース「にぎわひろば」を発行、ふれあい会食会も開始し、村の診療所の医師による認知症介護学習会を開催したり、飛騨寿楽苑、高山旧市内グループホーム認知症基礎講座研修等でのスタッフ研修も行いました。宅老所には、会員さんのお姑さんが週1〜2回通ってくださるようになり、高井の8歳の友達も、時々利用してくれるようになり、ふれあい会食会には、毎回5〜8人参加して下さり、認知症患者さんも一緒に楽しみました。

そうした活動を続ける中、この古民家を改装して平成15年10月に定員6名のグループホームを開所しました。12月には満員になり、それ以来1人の利用者さんが、このほのぼのターミナルを迎えられ、逝去されました。現在、この朝日町内の方が2人、高山旧市内の方が2人（内1人は朝日町出身）久々野町1人、荘川町1人と、高山市内にグループホームが5ヶ所しかないの、遠い町でも困った方優先に入居していただいています。

このグループホームの設立過程が、上述のように住民のボランティアグループが主体だったので、この地域の中で、できるだけオープンに暮らすことを心がけてきました。

開所以来、住民健診も、インフルエンザ注射も、町内の方たちと一緒に受診し、定期受診も往診も、朝日町診療所所長の医師が私たちNPO法人の理事で、看護師たちも会員なので、協力してもらっています。診療所で町内の方と一緒にいると、初めは奇異な目で見られたりすることもありましたが、めげずに何十回と受診の回数を重ねて通いました。

また、食料品も高山旧市内のスーパーのほうが安いのですが、できるだけ町内の農協で買い物をするようにしました。歩いては行けない距離なので、1日おきぐらいに車で買い物に行きます。その、歩くことが大好きな利用者さんが入居して以来、スタッフは毎日高山方面に向かって町内を一緒によく歩きました。隣町まで1日合計14〜5キロ歩いたこともありましたが、町内の駐在所と一緒に挨拶

に行き、お巡りさんと知り合いになりました。高山方面とは反対の近くのお店にも挨拶に行き、毎日通いました。

さらに、町内・各地域のイベントにも、利用者さんの体調の許す限り積極的に参加しました。春は、町文化部の研修バス旅行、高山祭り、すずらん高原祭り、各町・旧市内・萩原・下呂のお花見、夏は、朝日、久々野の盆踊り・花火大会、ドスコイ祭り、高根のかがり火祭り、秋は、小・中学校の運動会、紅葉祭り、荘川祭り、ひた朝日伝統芸能文化祭、ぶり街道祭り、など。

一方、平成16年6月から平成17年3月まで、各地区の公民館に出かけて行って、ふれあい会食会を行いました。認知症の理解を深め、介護予防や、介護サービスの利用方法など、高齢者にとって暮らしやすい情報の提供と体験学習を、行いました。具体的には、朝日村社会福祉協議会職員の話や、お巡りさんの詐欺予防の話、岐阜県障害半減運動研究所の保健師による物忘れ（記憶障害）予防の話、肩こり腰痛予防の呼吸法、雛様作り、貼り絵などと、食事も楽しみながら学習する機会を作りました。これには52回開催し延べ418人が参加、ほのぼの朝日の家で行われた、ふれあい会食会の参加者を合わせると528人の高齢者が参加され、当時の65歳以上高齢者は、ほのぼの650人ぐらい（内要介護高齢者101人）なので、かなり多数の方が参加されたこととなります。また、子育て支援事業も行っているので、開所以来毎年暮れには子供たちと餅つきをして、花餅も作ってきました。昨年は米作りにも挑戦しました。

こうして、日々の暮らしを積み重ねていた平成17年9月のある日、グループホームの一人の利用者さんが、世間話をしている時に「これからは歌と絵で他人を楽しませたい。」と、ボソッと言われました。グループホームの理念が、「尊厳を守り、安心で楽しい暮らし」「生きがいのある楽しい暮らし」だったので、折にふれ、利用者さんに生きがいの話を投げかけていたのです。ちょうど朝日町の伝統文化祭の出演者を募集していたので、ご本人に出演の意志を確認し、ご家族の了解を得て、早速申し込みました。

10月当日、町内の道の駅協にあるこだま館で、スタッフが利用者さんの紹介をした後、歌われました。一曲目は、マイクを持つ手が震えてみえましたが、途中インタビューに答えて2曲目の「籠の鳥」を歌い終わると、その堂々たる歌唱力に会場の方の大きな拍手に包まれました。舞台を降りてから、「感動しました。がんばってくださいね。」と何人もの方から声をかけられ、ご本人も大感激され、涙ぐまれました。

その後、同年12月には、各務原市での認知症セミナー、翌18年4月には、コープぎふくらしすけあいの会総会、10月には、朝日町伝統文化祭2回目と、張りのある声を披露されました。さらに、同年11月には、飛騨文化交流センターで行われた飛騨地区コープぎふくらしすけあいの会・飛騨市共催の認知症セミナーに、スタッフとともに出演し、理事長高井のグループホームほのぼの朝日の家の実践報告とともに参加者に大きな勇気を与えました。

絵のほうも、平成17年9月に、スタッフと二人で好きなところへ出かける「外出支援」といううちの独自のサービスを利用し、野麦峠に出かけ、日和田高原でスケッチを楽しんでから、すてきな絵を連続して描かれ文化祭に展示もして、住民の皆さんにも見ていただきました。そして、複数の福祉系大学のゼミの学生、傾聴ボランティア、認知症サポーター、外部評価調査員の見学・研修、町内の高齢者、高山旧市内や岐阜市、美濃市、可児市などのボランティアグループの訪問も受け入れ、利用者さんとスタッフが協力して昼食を作ってふれあい会食会も行ってきました。

一方、高井が、キャラバンメイトなので、高山市だけではなく、飛騨市、下呂市の市民グループや傾聴ボランティアの認知症サポーター養成の活動にも岐阜県飛騨地圏長興課や、高山市社会福祉協議会などと共に取り組んでいます。平成19年10月までに、300人近く養成しました。

例会報告

こうして、さまざまな活動に取り組んだ成果は、さまざまな場面で見られるようになりました。診療所では、耳の遠い利用者さんが大きな声で話されても、待っていられずに「外を見てくるわ」と診療所の外に出られても、それが当たり前になってきて、スタッフが他の利用者さんに関わっている時は、見守りをしてくださり、外へ出られると知らせてくださるようになりました。

ほのぼの朝日の家の近くでも、高山方面でも、高根方面でも、利用者さんが一人で歩かれています。「いま、一人で歩いているようだけど…」と電話で知らせてくださるようになりました。近くの店の方も、「いま、自動販売機で飲み物買って飲んでるけどいいのかな…」他のガソリンスタンドの店の中に入っていくと、「ここには、食料品は置いていないですよ」と頼んでおいた対応を快く引き受けてくださったりしています。農協では、利用者さんが買い物をする姿が普通になり、レジで、店員さんに気長に待ってもらったり、利用者さんの知り合いに会うと、世間話に花が咲いて「まめなかなか（元気だったかな）？」と気遣う言葉をかけあったりしています。

また、運動会、祖父母学級への参加などから、こんどは、ほのぼの朝日の家に小学校の総合教育で小学3年、4年の生徒たちがお手玉の遊び方を習いに来たり、グループホームはどんなところかを学習に来たり、土曜教室の子供たちが、自分たちの手作りクッキーをプレゼントしに来てくれたり、近所の子供が遊びに来てくれたり、利用者さんの近所の友達が散歩の途中で寄ってお茶を飲んでいたり、昼食を食べに来たり、祭に獅子が踊りに来てくれたり、日常的に、いろいろな方が訪れて来るようになりました。昨年から作り始めたお米も、田植え、草取り、稲刈り、稲こきに地域の常連さんがボランティアで参加してくれるようになりました。

そして、グループホームの実践報告を通して認知症と介護の学習としたいというさまざまな市民グループから高井に要請が来るようになりました。岐阜県地域振興課 飛騨市社会福祉協議会（以下社協）共催、高山市社協共催、下呂市社協共催の傾聴ボランティア養成講座（認知症サポーター）講座、河合町介護家族の会、三福寺町ボランティアグループ喜楽の会、生協くらしすけあいの会・飛騨市共催認知症セミナー、ひだ朝日芸能文化祭、外部評価調査委員学習会、福祉大学系ゼミなど振り返るといろいろなグループに報告しており、これから要請されているグループもあります。報告の中で、認知症の人のためのケアマネジメントセンター方式についても紹介し、認知症になった時によりよいケア（自分にとっての快い環境を整えてもらう）を受けられるように、自分史を書いておこうという提案もしています。報告後、見学に訪れる方たちもたくさんみえました。こうした中で、認知症に対して自分の問題として捉える気運が少しずつ芽生えてきているように思います。特に、歌を歌ってインタビューに答える利用者さんの活動は、地域の方たちが認知症に対する理解を深めるとともに、認知症になってもこうして生きがいを持って暮らせるんだという安心感をもたらす重要な役割を果たしました。

今後の展望としては、今までのような活動を継続し、もう少したくさんの方の認知症の方とその家族の暮らしを支えるためにデイサービスを開発したいと思えます。また、そのスペースを利用して、利用者さんの歌や踊りや実践報告ができるようにしていきます。また、他の利用者さんの生きがい探しに引き続き取り組み、他の利用者さんも、参加できるようにしていきたいと思えます。

また、小学校の合併で、コミュニティスペースが空になった秋神地区でのふれあい会食会や、長寿学級と一緒に認知症予防活動にも取り組み、さらに、小・中学校で認知症について取り組むよう働きかけていき、認知症になっても暮らせるやさしい町づくりを住民の方たちと一緒に実践していきます。

<ニコニコボックス>

●遠藤 隆浩さん、垣内 秀文さん

今年の10・11月はわりと暖かかったので油断してました。当たり前ですが急に寒くなり身に凍みます。皆様インフルエンザや風邪などに罹らない様に気を付けて下さい。本日は会員スピーチです。お待たせしました、満を持しての登場です、高井道子さん。いつものように明るく楽しいお話を期待しています。どうぞよろしくお願ひ致します。

●門前 庄次郎さん

先週報告有りました様に、地区大会で昨年度の活動の評価として「R I ロータリー賞・シルバー賞」を頂きました。これも会員皆様のご協力のお蔭で全員で頂いたものと思っています。有難うございました。

●遠藤 隆浩さん

昨日の遠藤会計のセミナーに何人かの方に来ていただきましてありがとうございます。ロータリークラブの友情をひしひしと感じました。

●内田 幸洋さん

昨日の遠藤隆浩税理士事務所のセミナーに参加させて頂きありがとうございます。とても参考になりました。

●岡田 賛三さん

全国技能五輪にて当社の社員4名が出場し、銀1、銅2を獲得しました。

●挾土 貞吉さん

飛騨産業社長 岡田賛三さん、この度の社員の受賞誠にめでたうございます。お陰様でわが社の社員 松葉も国家試験左官の部で表彰を受けてきましたので。

●田近 毅さん

11月26日歌舞伎座で行われた花柳寿輔の「追善 舞踊の会」に妻、花柳美玲が清元『落人』を演じ、大変好評を頂きました。観に来ていただいた会長夫人、平夫人、ありがとうございます。

●鴻野 幸泰さん

昨日は誕生日に花束を頂き誠にありがとうございます。本日は鴻野旅館の弁当をご利用いただき、いつもいつもありがとうございます。

●田中 武さん

今日が一番寒かったそうです。鴻野さん談で、数河に雪が積もったそうです。いよいよスタッドレスタイヤの時期となりました。皆さんお身体大切に頑張りましょう。本日早退させて頂きます。

●塚本 直人さん

本日は高山市の飛騨高山観光大学に参加のため早退します。インフルエンザが流行し始めたようです。もうすぐ年末です。みなさん体調管理には気を付けましょう！！

●平 義孝さん、斎藤 章さん、米澤 久二さん、新井 典仁さん、

黒木 正人さん

本日はいい肉の日。やはり、いい肉といえば、「飛騨牛」！昭和56年、のちに“飛騨牛の父”と呼ばれ、ブランドの立役者となる「安福号」が兵庫県より導入され、その産子が次々と素晴らしい産肉成績を収めます。そして統一名称を「岐阜牛」から「飛騨牛」へと変更し銘柄を推進するため、当時「飛騨牛」の商標を取得していた榎吉田ハムの全面的な協力を得て、昭和63年、飛騨牛銘柄推進協議会が設立されます。ここから飛騨牛の歴史は始まりました。ぜひ、今夜は飛騨牛を食らいつきたいものです！